



## 鍵

佐々木佳子

(青森)

この家に戻れる体があるかぎり施錠してもつ銀色の鍵

鍵ひとつ鞆に入れてゐることは家一軒を持ち歩くこと

鍵に付けた大間のマグロのキーホルダー鞆のなかで活きよく逃げる

ひとさじの〈龍角散〉を喉にまく少しむせつつ〈龍〉をとりこむ

平川にかかる朝霧橋ちかく貨物列車があんをんとゆく

鍵もたず伯母の空き家に来てしまふセロファンごしに見るごとさ家

暗がりに秒針の返す光あり一周ごとに一秒ほどの

時計屋が三回言つたオーバーホール悪の組織のやうで困つた

「ジムへ行き推し活をして孫みてる」友の言葉にエナジーがある

鍵の付く日記帳など売られぬき閉ぢこめられる言葉思ひき

落ちてゐた鍵はひとつの金属に戻りたがつて夜にまぎれこむ

家の鍵も持つことはない母の手をつつみこむ小さく淡し

施錠して立ち去るときに少しだけ体勢直すわたしといふ人

生まれくる春のかすかな日の暮れだ五分遅れて街灯がつく

仙台の樺通りの絵はがきの奥の奥から手招きする人

このごろの私

今さらながら高校時代の不完全燃焼を悔いている。運動部に入っていたればよかった。熱くなって明日を目指したかった。仲間と他愛なく泣いたり笑ったりで一日を使いたかった。今さらながらである。



## 初 雪

一ノ宮陽子

(鳥取)

このごろの私  
一月に三歳半の猫が死んだ。  
買って来た時から白血病、ウイルスに感染していたので、長  
生きはできないと分かっていた。  
それでも悲しい。せめて  
私にできることは、歌を作っ  
てやることくらいだ。

初雪は母の割烹着の白さ母さんそつと涙ふいてた

割烹着たたまれたまま母の不在埋めるやうに雪が降ります

初雪は照りつ翳りつ落ちてきて夫のたよりのやうで愛しいかな

初雪の積もりて白き田の径をとほざかりゆく夫に似る背

粉雪もぼた雪も降る睦月なりわれは七十三年生き来ぬ

飼猫の三回忌雪降りやまず空の果てまですつと冬です

初雪の舞ひ散る真昼 早逝せし二匹の猫の鳴くこゑがする

猫二匹虹の橋にて待ちをらむ一歳半と三歳半の

喪ひてゆくばかりなる歌ごころ濡らし立春雪降りつづく

創業は大正といふへらっぱやの鯛焼こぶり十匹もとむ

へらっぱやの鯛焼買ひて風邪に臥す友のもとへと急ぐ雪の日

へらっぱやの鯛焼手にし友の母涙ぐみをりなつかしいよと

冬の陽をついばむやうに椋鳥の石径伝ひ木の間に消える

雪しまく夜を眠れず病む母の棘ある言葉思ひ出しをり

少しだけ前に進めた気がします絵を描きあげて短歌仕上げ